

明治・大正期の建築作品集にみる清水組設計組織 その1

松波 秀子
(技術研究所)

The Works and Design Staffs of Shimizu-gumi during Meiji and Taisho Period, I

by Hideko Matsunami

Abstract

The contribution of the Shimizu-gumi design staffs for the technology of modern architecture through the analysis of the works of Shimizu-gumi during the Meiji and Taisho period was examined. In volume I, examination the works during 1885 to 1897 by analyzing nine documents, “Photographs of Architecture constructed by Shimizu-kata” (2 volumes) in which consists of 24 plates of description and photographs of architecture in a folder, and “Photography by arichitecture by Shimizu-gumi” (7 volumes) in which photography, description, and simple plans of 125 works are introduced in a folding book were done. Analysis of these documents was done together with the materials of Shimizu Corporations’s history archives and related materials, and as a result have made clear the early process of the development of the design department of the Shimizu-gumi in the middle period of the Meiji era.

概 要

明治・大正期に編まれた清水組の作品集を通して、当時の近代建築技術に対する清水組の取り組みについて考察した。その1では、明治18年から31年までの作品を収録した『清水方建築 いへの寫眞』(2種、全24作品)、『清水方建築家屋撮影』(7種、全123作品)の資料評価を行い、これらを清水建設社史資料及び関連資料に照らして検討し、明治中期における清水店の設計組織(製図場、技術部)の成立過程と様相について考察した。

§ 1. はじめに

清水店^{*}は明治21年から33年までに、9種の作品集を作製している。『清水方建築 いへの寫眞』2種と『清水方建築家屋撮影』7種で、明治18年から31年まで約20年間の清水店の施工あるいは設計施工による主要な作品を収録している。作製の経緯、目的、発行部数などは不明だが、明治19年に技師長を招聘して新しい建築技術に取り組み、本格的西洋建築を竣工させた記念に作製し、江湖に問うたのである。本稿では、これらの作品集を通覧し、資料評価を行ったうえで、清水建設社史資料、明治20年に創刊された『建築雑誌』、その他の資料に照らして検討し、清水組が建築技術の近代化に取り組んだ過程を、設計組織の成立と展開の側面から考察する。

ところで、清水の名と作品が広く知られたのは上記の作品集が最初ではない。幕末明治初期、二代喜助が建てた「築地ホテル館」(慶応4年)、「第一国立銀行」(明治5年)、「爲替バンク三井組」(同7年)は、新しい東京を象徴するランドマークとして格好の画題となり、国輝、三代広重、芳藤、芳虎、清親ら多くの絵師によって描かれ、東京土産として全国に流布した。絵師らは異なるア

ングル、構図で何枚も描き、なかでも築地ホテル館の錦絵は100種類を越すとされる。絵図の余白に建物概要、竣工年、そして「匠工 清水喜助清矩」と記されたものもあり、その名も知られるところとなった。これらは清水が作製したものではないが、その名と作品をアピールする最初期の作品プレートといえることができる。

※ 清水建設の旧称は、文化元年～明治14年：清水屋、清水方、清水店 明治14年～大正4年：清水満之助店(通称 清水方、清水店) 大正4年～昭和12年：合資会社清水組(通称 清水組) 昭和12年～23年：株式会社清水組(通称 清水組)である。本稿では、大正4年以前は清水店、同以降は清水組と称する。

§ 2. 明治中期の作品集

2.1 『清水方建築 いへの寫眞 壹帙』

清水店の最初の作品集で、明治18年から21年前半に竣工した主要な建築写真10葉と「モルタル製造器械」にて作業中の写真1葉、都合11葉を布製帙に納める。

『建築雑誌』明治22年1月号に「清水店より『いへの寫眞 壹帙』13葉が造家学会に寄贈された」という記事があり、遅くとも21年末までに作製されたと思われる。枚数が合

わなないことについては後述する。

上半分に建物名称、建設位置、建家坪数、建築費、全上壹坪ノ價、起工年月日、竣功年月日、工事日數、設計者、摘要(構造形式、外装仕様等)が記され、下半分に竣工写真を載せ、1件につき1枚に納めるが、渋沢邸と鐘淵紡績工場は建物背面の写真も載せ2枚とする。各写真の下に「清水氏ノ依頼ニ應シテ江崎禮ニ撮影」と記され、写真そのものが貴重で高価であった時代を窺わせる。

渋沢邸については『建築雑誌』(明治21年8月、11月)に同邸舞踏室、客室の窓掛と椅子の姿図と小林の解説が掲載され、内装は全て辰野金吾の承認を得て小林義雄と高山幸次郎が意匠と製図を行ったとある。同誌23年4月、7月号の巻末にも同邸の大判写真が掲載されている。なお、同年8月号には、渋沢邸の内装を担当した装飾師小林が、米国公使館の内装を手がけ同公使から賞状を受けたことが記されている。

明治21年6月竣工の東京人造肥料、日本郵船東京支店が1帙に収録され、同年4月に竣工し同年の『建築雑誌』その他に公表されている渋沢邸が1帙に収録されないのは不自然である。2帙には22年10月竣工の日本製鉄会社が含まれ、その作製は早くて22年末、おそらく23年初頭と考えられ、渋沢邸竣工から間が空きすぎる。正面と背面の2葉の写真(図-1)を加えれば「1帙13葉」となり『建築雑誌』の記述と合致し、渋沢邸は1帙に収録するのが合理的である。清水建設には「いへの寫眞」の原本はなく、その所在と複製をつくった経緯は不明であるが、この時、仕分けを誤ったと思われる。1帙の収録作品は以下の通りである。

建物名称	竣工年	設計技師
0. モールタル製造器械		
1. 郵船會社支店事務所	明21	J. Diack
2. 櫻井郁次郎君居館	明20	高山幸次郎
3. 通運會社事務所	明20	坂本復經
4. 英吉利法律學校	明20	辰野金吾
5. 東京人造肥料會社製造場	明21	辰野金吾
6. 日本郵船會社東京支店事務所	明21	佐立七次郎
7. 高等女學校教師居館	明20	小島憲之
8. 東京製網會社工場	明21	辰野金吾
9. 横濱税關事務所	明18	横濱税關
10. ボートハウス	明21	辰野金吾
11. 澁澤君居館	明21	辰野金吾

作品と並んで収録した「モールタル製造器械」は清水店が独自に開発したもので、同装置の図と写真(小判)が造家学会に寄贈されたことが『建築雑誌』(明治21年7月)に記され、同年8月号には小現場用に手練器械を改良したものであるという解説が掲載されている。

11件のうち、官庁工事は横浜税關事務所1件、清水店の設計施工は通運會社事務所(図-2)1件、初代技師長に

赴任したばかりの坂本復經の設計である。ただし、個人名を記しており当時の清水店におけるの技師長の地位が別格だったことを示す。辰野の設計が5件あり、際立っている。英吉利法律学校、東京人造肥料、東京製網等、その創立に渋沢が関与していることが指摘される。

明治20年1月創刊の『建築雑誌』は、後の「巻末附図・附図説明」欄の体裁はまだ確立しておらず、雑報欄にその時期に施工中あるいは竣工した建築作品から選んで建物概要の短い記事を書いていた。明治21、22年の雑報欄に掲載されたのは、英吉利法律学校(中央大学の前身)、桜井邸、渋沢邸、そして建物内の増築であったため『いへの寫眞』には収録されなかったが鹿鳴館内「東京倶楽部」(瀧大吉設計)の記事がある。また、同誌20年7月号には近代日本で最初の建築請負契約書とされる「英吉利法律学校新築約定書」の全文が掲載されている。『明治19年~大正12年主ナル建築物調査』※に収録されているのは、10件のうち、桜井邸、日本郵船東京支店、日本郵船横浜支店、英吉利法律学校の4件である。図-3は向島の帝国大学艇庫で、落成記念にレガッタが開催された。

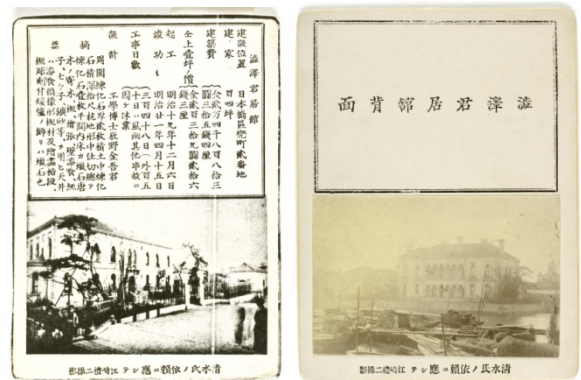


図-1 渋沢君居館

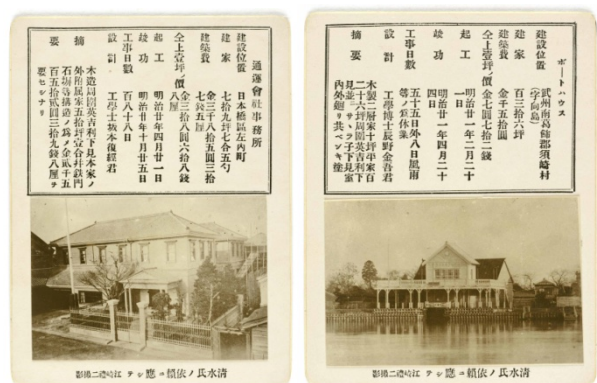


図-2 通運會社事務所

図-3 ボートハウス

※ 日本建築学会所蔵『明治19年~大正12年 主ナル建築調査』(謄写版刷、昭和10年)は、『明治大正建築寫眞聚覽』の基礎資料となったリストである。昭和11年春、東京、大阪及名古屋の各地で開催する建築学会創立50周年記念展覧会に向けて「記念展覧會ニ関スル特別委員會」が設置され、同展第3部「50年の建築」の準備の一環として、同部主任の堀越三郎を中心に調査、リストが作成された。同部は、このリストから精選し昭和の建

築も含め、建築学会創立の明治19年から昭和10年まで「50年の建築」写真展とし、その序奏として明治元年から同18年までの建築物の写真も加えられた。大正12年の大震災で多くの資料が焼失し写真の収集は困難であったが、堀越が年来収集した写真を中心として展示され好評を博した。堀越は大正2年～6年、清水組設計部に在籍した。従って清水組設計の特定、担当者の特定は信頼性が高い。写真展の好評を受けて建築学会は「明治建築資料ニ關スル委員會」を設置し、将来の為に図集の刊行を企画、資料を集め難い明治大正の250件を収録し、建物名称、所在地、竣工年月、経過(現存、焼失)、設計者、施工者を付記して刊行したのが建築学会編『明治大正建築寫眞聚覽(建築學會創立五十周年記念展覽會出陳)』(昭和11年12月)である。(『明治大正建築寫眞聚覽』の明治建築資料ニ關スル委員會委員長大熊喜邦による「はしがき」による。)

2.2 『清水方建築 いへの寫眞 貳帙』

渋沢邸が1帙に含まれる可能性が高いことはすでに述べた。渋沢邸を除けば、明治21年12月から22年10月までに竣工した主要作品のなかから13件収録し、体裁、記載事項は1帙と全く同様である。明治22年末から23年前半に作製されたと思われる。収録作品は以下の通り。

建物名称	竣工年	設計技師
1. 澁澤君居館	明21	辰野金吾
2. 日本製鐵會社事務所	明22	伊藤為吉
3. 日本煉化製造會社工場	明22	坂本復經
4. 改良演藝會々場(友樂館)	明22	中村達太郎
5. モンデグー・カークツド君邸	明22	Josiah Conder
6. 横濱郵便電信局	明22	佐立七次郎
7. 王子製紙會社工場	明22	米国人(不詳)
8. ベン子(ネ)ツト氏邸	明22	J. Diack
9. 第卅九國立銀行本店倉庫	明22	中村達太郎
10. 松田亭	明22	清水店員
11. 第三回内國勸業博覽會器械館	明21	農商務省
12. 第三回内國勸業博覽會壹号本館	明21	農商務省
13. 鐘ヶ淵紡績會社工場	明22	鐘ヶ淵紡績
14. 牛込區拂方町九番地邸(穂積陳重邸)	明22	中村達太郎

13件のうち、官庁工事は3件、清水店の設計施工は6件で、約半数を占める。他の7件は、伊藤為吉、コンドル、佐立七次郎、ダイアックで、当時の実力者の設計である。設計施工6件のうち、初代技師長坂本の設計1件、囑託で技師長代行の中村達太郎3件、清水店員1件である。技師長と技師長代行の氏名は記すが清水店員の名は記していない。当初の技師長は鳴り物入りで招聘された工学士で、生え抜きの店員とは別格で技術面では支配人を凌駕した。また造家学会の役員も務めるなど店以外の活動も行った。明治21年までの帝大卒業生はわずか22名、建築界での専門家の少ない当時、当然のことであった。設計組織が拡充した大正、昭和初期に刊行された自社の作品集では清水組技術部あるいは同設計部の設計と

記され、技師長の氏名も記されないようになる。ただし、『建築雑誌』など別の媒体に作品紹介される場合は、主担当者の名が記された。清水店員設計の松田亭は木造和風の料亭(166.7坪)、従来の手慣れた技術で18日で完成させている。『建築雑誌』には渋沢邸(附図、写真有り)、横浜郵便局、日本煉瓦、改良演芸会、王子製紙、内国勸業博覽會本館、穂積邸の6件の記事があり、『主ナル建築物調査』には横浜郵便電信局、穂積邸、日本煉瓦、カークツド邸、改良演芸館、王子製紙、鐘ヶ淵紡績工場、ベンネット邸の8件が掲載されているほか、後述の年代不詳『清水方建築家屋撮影』に収録された英吉利法律学校の増築・東京英語学校(後の日本中学校)も掲載されている。民間工事も当時の主要な建築作品として官庁工事に肩を並べるとともに、清水店の設計施工の作品が当時の建築界の中で評価されていることが窺える。

2.3 明治廿四年九月製『清水方建築家屋撮影』

『清水方建築家屋撮影』は『いへの寫眞』に続くシリーズで、明治24年9月、同25年9月、同26年9月製が各1冊、同33年12月製が3冊、年代不詳1冊のほか、明治24年9月製の再製版(27年7月)が現存する。

布装の折本で天地の小口に金箔を施す。原則として、見開き右頁の上半分に建物情報の文字稿、下に竣工写真、左頁に図面を示す。『いへの寫眞』にはなかった目次を付し、明治27年製と28年製には凡例も付す。各建物の説明がやや詳細になり、建物名称、建設位置、建坪、各階の面積、建築費、坪単価、起工、落成、工事日数、設計技師、監督技師、摘要に地形、構造形式、内・外の仕様等、場合によっては特記仕様を記す。写真だけでなく各建物の平面図、建物によっては配置図も載せ、1件につき2頁～3頁を割く。収録作品は以下の通り。

建物名称	竣工年	設計技師
1. 小石川音羽邸(山田顯義伯爵邸)	明23	渡邊 讓
2. 日本橋區北新堀邸(浅野總一郎邸)	明23	河合浩藏
3. 牛込區鷹匠町邸及倉庫(平岡通義邸)	明22	渡邊 讓
4. 神奈川縣知事官邸	明23	渡邊 讓
5. 第二十七國立銀行	明23	渡邊 讓
6. 静岡第三十五國立銀行東京支店	明23	渡邊 讓
7. 王子製紙會社事務所	明23	清水店員
8. 帝國假議事堂附属會話兼書見室	明23	内務省
9. 帝國假議事堂附属印刷場	明23	内務省
10. 學習院校舎	明23	渡邊 讓
11. 學習院構内青年舎	明23	渡邊 讓
12. 東京府尋常師範學校附属小學校	明23	東京府
13. 日本メリヤス製造會社工場	明23	渡邊 讓
14. 東京毛絲紡績會社工場	明22	渡邊 讓
15. 砲工學校	明23	近衛經營部
16. 陸軍工兵會議及工兵第一方面 新築并移轉	明23	東京陸軍經營部

17. 第三回内國勸業博覽會式場 明 23 高山幸次郎
 明治 22, 23 年に竣工した 17 件(22 年/2 件, 23 年/15 件)を収録、うち官庁工事は 8 件。過半の 10 件が清水店の設計施工で、官庁工事 3 件を含む 9 件は二代技師長渡辺謙の設計で、残る 1 件は清水店員設計の最初の洋風建築、王子製紙会社事務所である(図-4)。技師長渡辺の活躍ぶりが窺える一方、設計担当の店員が作品集に収録するに足る煉瓦造西洋建築を設計する力をつけてきたことを示す。『建築雑誌』には山田邸の記事と附図があり、『主ナル建築物調査』には学習院、山田邸、神奈川県知事官邸、東京毛糸紡織、砲工学校の 5 件が掲載されている。



図-4 王子製紙会社事務所 清水店員設計

2.4 明治廿五年九月製『清水方建築家屋撮影』

建物名称	竣工年	設計技師
1. 國分氏商店	明 24	渡邊 謙
2. 磯野氏商店(横濱明治屋)	明 24	渡邊 謙
3. 横濱居留地第七十一番館	明 24	J. Diack
4. 横濱居留地第十四番館	明 24	J. Diack
5. 都新聞社	明 23	渡邊 謙
6. 近衛歩兵第一旅團第一第二聯隊營	明 24	陸軍省
7. 行政裁判所訟廷	明 24	片山東熊
8. 西ヶ原邸(古河邸)西洋館	明 25	久留正道
9. 西ヶ原邸(古河邸)日本家	明 25	久留正道
10. 尾張紡績會社	明 25	渡邊 謙
11. 品川電燈會社	明 25	渡邊 謙
12. 赤阪新坂町邸(木戸邸)	明 25	樋口正俊
13. 陸軍要塞砲兵營	明 24	工兵第一方面
14. 東京法學院改築	明 25	横河民輔
15. 帝國大學圖書館	明 25	文部省
16. 水準原點臺	明 24	佐立七次郎
17. 横濱貿易商組合共同倉庫	明 24	渡邊 謙 監督/横河民輔
18. 御茶の水橋	明 24	原 龍太

明治 23, 24, 25 年に竣工した 18 件を収録、うち土木工事が 1 件、官庁工事は 5 件。1/3 にあたる 6 件が清水店の設計施工で、6 件とも渡辺謙の設計である。『建築雑誌』には磯野氏商店(横濱明治屋商店)、帝国大学図書館の記事と附図があり、『主ナル建築物調査』には都新聞社、近衛歩兵第一第二聯隊、横濱貿易商組合共同倉庫、尾張紡績、古河邸(西洋館/日本家)、帝国大学図書館、東京法学院改築の 8 件が掲載されている。

2.5 明治廿六年十二月製『清水方建築家屋撮影』

建物名称	竣工年	設計技師
1. 澤田氏住居	明 25	渡邊 謙
2. 宮下氏住居	明 25	渡邊 謙
3. 名古屋郵便電信局	明 25	逓信省財務課
4. 成川氏住居	明 26	曾彌達藏
5. 倉田氏商店	明 26	渡邊 謙
6. 王子製紙株式会社第三工場	明 26	渡邊 謙
7. 樺山氏邸西洋館	明 26	山下啓次郎
8. 北海道炭礦鐵道株式会社東京支社	明 26	本社
9. 横濱外國人居留地二百九番バビール商會倉庫	明 26	

監督: Mr. J. Diack. 設計: Mr. J. Lescas.

10. 第百銀行横濱支店倉庫	明 26	
	監督: 横河民輔 設計: 渡邊 謙	
11. 氣賀氏住居	明 26	渡邊 謙
12. 今村氏住居	明 26	渡邊 謙
13. 鐘淵紡績株式会社女工寄宿舎	明 26	横河民輔
14. 柿沼氏倉庫	明 26	渡邊 謙
15. 明治座	明 26	宗兵藏・横河民輔
16. 三井銀行横濱倉庫	明 25	渡邊 謙
17. 厩橋架橋	明 26	倉田吉嗣・岡田竹五郎
18. 綾戸橋	明 26	群馬縣技師 野澤房敏
19. 棚下橋	明 26	群馬縣技師 野澤房敏

明治 25, 26 年に竣工した 19 件(25 年/3 件, 26 年/16 件)を収録、うち土木工事が 3 件、官庁工事は 1 件。半数の 9 件が清水店の設計施工で、いずれも渡辺謙の設計である。『建築雑誌』には明治座、三井銀行横濱倉庫の記事があり、『主ナル建築物調査』には宮下邸(眼科医院)、名古屋郵便電信局、王子製紙第三工場、第百銀行横濱支店倉庫、明治座、三井銀行横濱倉庫の 5 件が掲載されている。

2.6 明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』1

建物名称	竣工年	設計技師
1. 奠都三十年祝賀會式場	明 31	清水釘吉
	建築技師: 岡本鑒太郎 名誉顧問技師: 辰野金吾	
2. 大喪使假建物		
3. 上毛倉庫株式会社倉庫	明 29	岡本鑒太郎
4. 京都銀行	明 31	神谷邦叔 岡本鑒太郎
5. 奠都三十年祭日本橋緑門	明 31	清水釘吉
	建築技師: 岡本鑒太郎	
6. 櫻島臨時陸軍檢疫所	明 28	陸軍省
7. 西陣撚糸再整株式会社 第 1, 2 期	明 28, 30	清水店員
8. 關西鐵道株式会社愛知停車場	明 32	長野宇平治
9. 帝國大學法科教室	明 28	文部省
10. 金町製瓦株式会社事務所	明 27	岡本鑒太郎
11. 寒川神社御社殿	明 28	神奈川縣廳
12. 中上川邸		無記
13. 山縣邸	明 31	新家孝正君
14. 名古屋三井製糸所繭倉庫并蒸殺場	明 29	三井製糸所

15. 桑名紡績株式會社寄宿舎食堂倉庫洗濯場便所	明 30	桑名紡績株式會社
16. 桑名紡績株式會社第一工場	明 30	清水本店
17. 丸三麥酒株式會社醸造工場	明 31	妻木頼黄
18. 丸三麥酒株式會社事務所	明 31	名古屋出張店
19. 知多紡績株式會社工場其他	明 31	当店
20. 尾張紡績株式會社第二工場	明 28	清水店員
21. 名古屋紡績株式會社第二工場	明 29	当店
22. 名古屋劇場株式會社(御園座)	明 30	岡本鑒太郎

明治27～31年に竣工した22件(27年/1件、28年/5件、29年/2件、30年/4件、31年/7件、無記/1件)を収録、うち官庁工事は5件。半数の11件が清水店の設計施工である。3代技師長清水釘吉の設計(岡本が建築技師)1件、後に4代技師長となる技師岡本鑒太郎の設計3件、岡本と神谷邦叔との共同設計1件である。この他、清水本店1件、清水店員2件、当店2件、名古屋出張店1件、都合6件が清水店の技術者の設計である。『建築雑誌』には名古屋紡績の記事があり、『主ナル建築物調査』には京都銀行、関西鉄道愛知停車場、中上川邸、桑名紡績、丸三麦酒、御園座の6件が掲載されている。

2.7 明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』2

建物名称	竣工年	設計技師
1. 東京瓦斯紡績株式會社	明 29	清水釘吉・岡本鑒太郎
2. 基督教徒青年會館	明 27	ジョシアー、コンドル
3. 本庄商業銀行倉庫	明 29	岡本鑒太郎・清水釘吉
4. 工手學校	明 29	清水釘吉・岡本鑒太郎
5. 參謀本部廳舎 新營及増營	明 32	東京陸軍經營部
6. 名古屋商業會議所 西洋館	明 28	当店
日本家	明 28	會議所
7. 大谷派本願寺中學寮	明 27	佐々木岩次郎
8. 丁酉銀行改築	明 30	清水店員
9. 深川福住町澁澤家(増築)	明 30	岡本鑒太郎
10. 東京貯藏銀行淺草支店		無記
11. 帝國(室)奈良博物館	明 27	片山東熊
12. 東京郵便電信局小包郵便事務所		無記
13. 高天河原閘門	明 27	山内市太郎
14. 横濱石油槽所	明 27	無記
15. 鐘淵紡績株式會社第二水溜臺	明 29	平野勇造
16. 東京瓦斯株式會社事務所	明 31	岡本鑒太郎
17. 東京防禦總督部及東部都督部	明 30	東京陸軍臨時建築本部
18. 奉迎門	明 28	田島禰造
建築技師：岡本鑒太郎 名譽顧問技師：辰野金吾		
19. 永代橋改築	明 30	東京府廳
20. 千住製絨所毛布工場	明 27	千住製絨所
21. 名古屋教會堂	明 27	岡本鑒太郎
22. 鐘ヶ淵紡績株式會社第二工場		無記
23. 磯野商會(明治屋輸出入店)	明 30	無記
24. 金子氏邸	明 29	清水店員

明治27～32年に竣工した24件(27年/7件、28年/2件、29年/3件、30年/5件、31年/2件、32年/1件、無記/4件)を収録、うち土木工事が2件、官庁工事は5件、約4割の9件が清水店の設計施工である。3代技師長清水釘吉と技師岡本鑒太郎の共同設計3件、技師岡本の設計2件、技師田島禰造の設計(岡本は建築技師)1件、技師・技師長の設計の他、清水店員2件、当店1件、都合3件が店員の設計になり、設計を手がける技術者が育てていたことが読み取れる。鐘紡工場の設計者は書かれていないが『建築雑誌』には鐘紡の吉田技師の設計とある。同誌には東京瓦斯紡績、帝室奈良博物館(附図有り)、永代橋の記事があり、『主ナル建築物調査』には基督教徒青年會館、工手學校、帝室奈良博物館、千住製絨所毛布工場の4件が掲載されている。

2.8 明治三十三年十二月製『清水方建築家屋撮影』3

建物名称	竣工年	設計技師
1. 日本燃糸株式會社(京都)	明 30	清水店員
2. 大阪郵便爲換貯金管理支所	明 29	遞信省
3. 京都株式取引所	明 30	植村常吉
4. 京都鉄道株式會社嵯峨停車場	明 30	片岡謙吉
5. 京北織物合資會社 第1,2期	明 30,31	清水本店員
6. 大阪電話交換局	明 28	遞信省
7. 京都織物株式會社第三工場	明 31	植村常吉
8. 日本織物株式會社工場(増築)	明 27	日本織物會社
9. 日本カタン糸株式會社	明 30	茂庄五郎
10. 大阪今橋小學校		無記
11. 北垣邸日本家	明 30	鶴飼源三郎
12. 第一銀行本店假營業所	明 31	岡本鑒太郎 監督/新家孝正
13. 西陳(陣)製織物株式會社	明 30	高村敏太郎・清水店員
14. 安西商店	明 29	設計・建築：岡本鑒太郎
15. 大阪毛絲紡織株式會社	明 30	設計/建築：神谷邦叔
16. 第百銀行横濱支店	明 30	岡本鑒太郎
17. 泉染物工場	明 31	清水釘吉 建築技師/岡本鑒太郎
18. 東京貯藏銀行支店	明 31	設計/建築技師 岡本鑒太郎
19. 西尾邸	明 31	清水店員
20. 深川猿江町耐震家屋		無記
21. 瀬田橋	明 28	清水安吉君
22. 朝山邸	明 29	設計/建築技師 岡本鑒太郎
23. 横濱正金銀行	明 31	妻木頼黄
24. 横濱共同電燈株式會社第二發電所	明 31	宗兵藏

明治28年2月～31年10月に竣工した22件(28年/2件、29年/3件、30年/9件、31年/8件、無記/1件)を収録。うち、土木工事が1件、官庁工事は2件。約半数の10件が清水店の設計施工である。3代技師長清水釘吉の設計(岡本は建築技師)が1件、技師岡本の設計は5件。この設計のほか、清水本店1件、清水店員2件、清水店員と外部の高村敏太郎との共同設計1件、都合4件が清水店の技術者の設計になる。『建築雑誌』には京都鉄道

嵯峨野停車場(附図有り)、大阪電話交換局の記事があり、『主ナル建築物調査』には大阪郵便為替貯金管理所、京都株式取引所、京都鉄道嵯峨野停車場、大阪電話交換局、日本カタン糸、今橋小学校、北垣邸、第百銀行横浜支店、西尾邸の9件が掲載されている。

2.9 その他の『清水方建築家屋撮影』

作製年月不詳の『清水方建築家屋撮影』が1冊ある。これは『いへの寫眞』1・2帙の24件のうち、2件削除し、新たに2件を加えて再編され、都合24件を収録する。明治24年から27年の間に作製されたと思われる。帙入りでなく折本で、体裁は概ね『家屋建築撮影』に倣うが、平面図は掲載せず、「江崎禮二撮影」のキャプションは付さない。表記内容や掲載写真の角度が一部異なるものもあるがほとんど重複する。『いへの寫眞』から削除されたのは、第三十九国立銀行本店倉庫とボートハウス、追録されたのは第一国立銀行横浜支店事務所と日本郵船會社横浜倉庫である。『いへの寫眞』にあった英吉利法律学校は「英吉利法律學校東京英語學校教場及事務所」となり、増築された東京英語学校を含む写真に差し替え、設計者も当初の辰野金吾に、坂本復経、藤本壽吉、中村達太郎が加わる。また、桜井邸、王子製紙、日本煉瓦など『いへの寫眞』と写真の角度が若干異なるものもある。以下に追録された作品を記す。

建物名称	竣工年	設計技師
第一国立銀行横浜支店事務所	明22	渡邊 謙
英吉利法律學校東京英語學校教場及事務所	明22	

坂本復経、辰野金吾、藤本壽吉、中村達太郎

このほか、明治24年製・同27年製『清水方建築家屋撮影』が現存する。文字通り24年製の復刻で、布装の裂地の色調と唐草の地紋が原本と若干異なる。収録内容は全く同じだが、各平面のタイトルが手書きから活字に改められ、一部写真の角度が異なるものがある。前述の『いへの寫眞』1・2帙の合本として再編された折本の布装は27年製復刻本と類似しており、この頃復刻されたのかも知れない。清水店の実績を示す資料として広く配付し、改訂版、再版を作製したと推測される。

§ 3. 明治中期の清水店

3.1 三代店主 清水満之助

明治14年に二代喜助が死去し、清水満之助が三代店主となる。初代技師長を聘する19年頃までに、清水店が請け負った主な建築工事は、三井銀行札幌支店(明治14、木造)、横浜加賀町警察署(同17)、横浜税関事務所(同18、煉瓦造、横浜税関設計)、豊川稻荷などである。三井銀行札幌支店、横浜税関事務所は、二代喜助の弟子で、ダイアックから西洋建築を学んだ大工出身の店員松永宗四郎が工事を担当した。煉瓦造の本格的西洋建築はほとんど官庁の直営工事であった当時、民間の

建設業者が請け負った最初期の事例である。

満之助は将来本格的な西洋建築の建設が多くなることを見越し、大工棟梁による前近代的な請負体制からの脱却をはかりさまざまな経営改革を断行すると同時に、建設事業の発展には新しい近代技術を獲得することが不可欠だと考え、辰野金吾の推薦する坂本復経を技師長(当初は工部監督)に招聘、店の業務を支配人と技師長で分担する体制とし、技術に関する権限は技師長に委ねた。

満之助の技術重視、技術者育成の姿勢は、造家学会の発足、工手学校の設立、運営等に深く係わったことにも見られる。満之助が明治20年4月に急逝すると『建築雑誌』(明治20年6月)は、追悼記事「故清水満之助小伝」に2頁を割き、巻末に銅版画の肖像を掲載した。請負業が社会的に低くみられていた当時には異例のことであった。同誌によれば、満之助の「経営ニ成レル大工事大略」として、横浜税関内輸入物上家、同税関構内倉庫、長浦消毒所浴室及事務所、横浜和泉町避病院、同税関煉化庫、横浜洋銀取引所、神奈川縣戸部監獄未決監、横浜聯合生糸荷預り所倉庫、同外国人居留地全体下水改良、同石川中村揮発物貯庫、同税関本館、東京龍閑川筋及濱町川筋新川開鑿、新皇居謁見所東西化粧ノ間、東京兜町渋沢邸、横浜日本郵船會社支店及倉庫を記している。さらに、同10号に「前号ニ輓近工事ヲ記載セシガ清水商店ヨリ同店受負ノ分ヲ委細申越アリタルニヨリ重複ナカラ左ニ掲グ」として、以下の13件を訂正載録している。府内：兜町渋沢邸新築一切(辰野)、内国通運會事務所其他新築(坂本)、郵船會社事務所新築(佐立)、深川渋沢邸倉庫新築(坂本)、富士見町三井邸倉庫二棟新築(坂本)、東京俱樂部増築(瀧)、府外：横浜郵船會社事務所及倉庫新築(ダイアック)、神奈川県官舎全体新築(神奈川県)、横浜渋沢喜作師商店倉庫新築、同沖守固師食堂新築、神奈川県庁増築(神奈川県)、鎌倉海浜院事務所新築。横浜の件数が多いのは、二代喜助の歿後、清水武治の東京店と満之助の横浜店に分かれていたからである。渋沢の回想によれば、満之助は勉強家で舅父の遺志を継いで建築界に雄飛しようとして熱心から、横浜に留まらず東京の建築界にも手を延べ、私(渋沢)の家や、第一銀行など満之助店でやり、当人も私の家によく出入りし、建築界の現状の欠点や将来への改良について談話したという。

3.2 初代技師長 坂本復経(在任：明19.7~21.5)

坂本復経(安政2~明治21)は、明治14年工部大学校造家学科を卒業(第3回卒)後、工部省、内務省を経て19年7月入店した。当時は「技師長」の呼称はなく「工部監督」と称した。清水店において坂本が関与した建築は、英吉利法律學校英語學校教場及事務所(明治22、辰野金吾、藤本壽吉、中村達太郎と共同)、通運會社事務所(明治25)、日本煉瓦製造會社工場(明治22)、深川福住町渋沢邸倉庫

(『建築雑誌』明治20年10月号による)、富士見町三井邸倉庫二棟(同前)の5件が確認される。

『明治工業史』によれば「坂本復経ハ清水店ノ清水満之助の顧問技師タリシ故、同店に於イテ引受タル工事ハ一切關涉セシナリ」とあり、技師長として全てに目配りをしていただようである。建築家としての教育を修めた坂本が技師長に就き、旧来の店員は間近に坂本が設計する姿を目にし手伝いながら、従前の棟梁が行っていたやり方とは異なることに戸惑いながらも、近代的な設計という行為と概念があることを実感したに違いない。しかし、明治20年満之助と共に欧米視察し、帰国後21年5月に逝去した。

坂本の遺作である鍋島邸については、建築主任の吉富忠干の「鍋島邸建築報告」(『建築雑誌』明治34年11月)によれば、清水入店前の明治17年から図案を起こし、同20年7月設計完了(『明治工業史』には、欧米遊学で得た「最新智識ヲ齎ラシ」で設計を仕上げたとある。)、同年9月着工、工事を進めていたが翌21年5月に坂本が急逝、原設計を尊重して工事を継続することとなり、施主の意により辰野金吾が計画監督をすることとなったが、辰野が日本銀行の用務で渡欧のため、同21年8月から片山東熊がこれに代わり、翌22年10月に帰朝後は再び辰野が監督の任にあたり、同25年7月に竣工した。辰野、片山ともやむを得ない場合を除き坂本の原計画を崩さぬよう実行した。施工に就いては、定備と分担請負の二種とし、定備に属する者最も多とした。また、横河民助が計画補助の労を執ったとある。

『明治工業史』によれば、鍋島邸は西洋風住宅を特に専門家に依頼して設計監督せしめた最古の大邸宅とされるが、鍋島家が坂本に西洋館の設計を依頼したのは彼が佐賀県出身であることと無縁ではなからう。設計を引き継いだ辰野も佐賀県出身である。また、初代喜助は天保の頃、その仕事ぶりが認められて鍋島肥前守(佐賀藩)の御普請となった縁がある。だが、清水店入店以前に設計が開始されていたにせよ、技師長坂本の設計監督であるにもかかわらず、一式請負できなかった。当時、木造建築は一式請負、煉瓦造西洋建築は分割請負が通例で、清水のような総合請負にとって分割請負はきわめて不利であった。これを打破するためにも、三代満之助は工学士を技師長に迎えたのであったが、満之助も坂本も志半ばで急逝し、坂本亡き後、代わって設計監理を遂行できる技術者がまだ育っておらず、自信をもって本格的西洋館を請け負う技術力を備えていなかったことを示している。

満之助を継いで支配人となった原林之助は、高等教育を受けた技術指導者の必要性を再認識し、清水店内部に本格的な西洋技術を着実に蓄積する必要を痛感したことは想像に難くない。当時、民間の建築請負業が工学士、それに準ずる高等専門教育を受けた者を採用することは

きわめて稀であったが、以後も技師長を招聘するだけでなく、技師として工学士を、中堅技術者として高等工業学校や専門学校出身者を採用し、最新の技術力を保有する方針(満之助の遺志)を貫いた。

3.3 顧問 技師長代行 中村達太郎(在任:明21~24.1)

中村達太郎(万延1~昭和22)は、明治15年工部大学校造家学科を卒業後、皇居後造営事務局に出仕し、20年帝国大学工科大学の教官となる。坂本が急逝した後、辰野の推薦で助教授の中村を顧問として迎え、技術上の指導を受ける体制を整えた。中村が正式に技師長とならなかったのは大学との兼務が許可されなかったためである(『清水建設株式会社社史資料』一卷)。この前後に中村が関与した建築は、改良演芸会、第卅九国立銀行本店倉庫、穂積邸の3件、いずれも明治22年竣工である。後年、中村が中心となって編む『日本建築辞彙』に、職人達が現場で用いる言葉が豊富に収録されているのは、この期間に実際の現場を数多く見聞したことに関係しているかも知れない。

清水釘吉は、坂本急逝後の清水店の様子を(坂本技師長亡き後、後任者がなく、中村博士に臨時に指導を受けたのだが、西洋建築の知識をもった店員がいないので)「日本建築以外の西欧建築は實に骨が折れました。それで中村博士にお願い申上げて其の智慧を拜借すると云ふことで間に合した。仲々さう云ふやうな具合で人が出来ませぬので故に已むを得ず設計、製圖室と云ふものを設けまして、下げ渡された其の設計に就てのデテールとか、又稀にちつぽけな圖も書かなければならぬと云ふので、製圖して居った」と回顧している(『建築雑誌』1936年10月「回顧座談会」)。本格的な設計組織ができたわけではないが、この時期に「製図室」が店内に設けられた、あるいは店の1室が製図専用の部屋に充てられた。



図-5 清水本店 渡辺萊渚筆(『清水建設社内報』1960年7月)

当時、本石町にあった本店は土蔵造りの町家で、奥に付属家が延びていた。明治17年に入店した浅井長次郎は、奥の木造家屋の階下を製図室に、階下(階上の間違いか)を宿泊の場所とした外、製図場は別室があり木造平家一棟をこれに当てた、製図場として使用されていた当時という初代技師長坂本復経先生、二代技師長渡辺讓先生ご活躍の時代で、中村達太郎先生やフリーハンドの名手高山幸次郎先生など時々応援に来店されたと回顧して

いる(『清水建設社内報』昭和27年11月)。馴れない西洋建築の施工にあたり、設計者と施工者の密な連絡と確認はきわめて重要であった当時、進行中の建築の設計者をはじめ、外部の建築家も屢々製図場に入出入りしたことが窺える。新しい建築技術についての論議もなされたに違いない。なお、奥の別室では、明治19年5月、造家学会(建築学会の前身)の第一回講演会が開催されている。

高山幸次郎は、明治初期から工部省技手として活躍、皇居造営に従事後、内務省、臨時建築局に転じ、明治20年に辞任していた。清水店、坂本とは皇居造営の現場で知ったと思われる。『いへの寫眞』にある桜井邸、内国勸業博覧会会場の設計、兜町渋沢邸の内装設計(小林義雄と共同)を手がけている。高等教育を受けていないが明治初期から役人技手として培った力量で清水の若い技術者の教育に一役買ったと推測される。後年、東宮御所造営技師となる。なお、装飾師小林に渋沢邸の内装を依頼した経緯は不明だが、満之助、釘吉と同じ宮津藩士の出身であることと無関係ではあるまい。

『いへの寫眞』にモルタル練器械が収録されていたように、製図場の技師長、技師をはじめとするスタッフは設計だけでなく近代の施工も包括して技術を担当していた。明治22年、清水店に關係のある人々によってキ「工商会」がつくられ、互いに親睦をはかると共に清水店の発展を期した。当時は店員及び職方が会員で、技師や技師長も新しい技術に関する報告をする等、技術の研鑽の場であった。

3.4 二代技師長 渡辺譲(在任:明24.1~27.2)

渡辺譲(安政2~昭和5)は、明治13年工部大学校造家学科を卒業(第2回卒業生)、工部省営繕局技手、内務省営繕課技手を経て、臨時建築局に転じ、19年妻木頼黄、河合浩蔵らとドイツ留学。20年帰国後、臨時建築局技師となり、21~22年、欧州各国を視察。帰国後、裁判所建築主任、工事部長心得。明治23年、臨時局廃局となり、翌24年、辰野の推薦により3年契約で入店した。

坂本が急逝し中村顧問の後を次ぐ技師長として、多くの作品を手がけるとともに後進を育成し、同年入店した技師の岡本鑿太郎を後任技師長にすべく指導した。

在任3年間の清水店における渡辺の作品は『清水方建築家屋撮影』で確認するだけで、山田邸、第一銀行横浜支店、学習院校舎など24件ある。渡辺の力量もさることながら、清水店製図場には多くの設計をこなす渡辺を支えるアシスタントスタッフが育っていたと推測される。渡辺が清水組設計組織の下地をつくったといつてよい。27年、清水を退店後、海軍省海軍技師に帰任した。

3.5 三代技師長 清水釘吉(在任:明治27.2~10)

清水釘吉(慶応3~昭和23)は宮津藩士小野高永の次男、明治13年、叔父にあたる清水満之助を頼って横浜に出て清水家に遇す。英語専修学校、慶応義塾、青山英和学校、

第一高等中学を経て、帝国大学工科大学造家学科に進む、24年7月卒業と同時に三代満之助の長女タケと結婚し清水家に入る。同年、満之助未亡人ムメに代わり四代満之助の後見人となる。27年、三代技師長となるが、同年10月、日清戦争に応召し、帝大1年先輩の岡本鑿太郎に引継ぐ。31年10月、四代満之助が成人となり後見人を辞退、33年7月、清水満之助店営業監督。34年11月から35年8月まで欧米各国を視察する。大正4年10月、合資会社清水組店長に就任(昭和2年、営業規定の改正により店長を社長に改称されるまで店長と称した)、昭和12年10月、株式会社清水組社長となる。

『清水方建築家屋撮影』の作品中、岡本技師らとの共作も含め工手学校、奠都三十年祝賀会会場など6件の他、飛鳥山の渋沢本邸洋館(明治33)を設計している。

『建築雑誌』(明治29年2月)の雑報欄に「建築業の現状及将来」と題する中外商業新報の記事が転載され[「建築業と技師」]について「抑々我邦に於て建築博士又は学士と称すべきもの即ち我が大学の本科、別科の業を卒へ又は外国に遊学して其称を得現に職を建築の事に執れるもの及び雇入の外国人を合せて無慮四十五六人はあるべきも全国の上より云へば五十人にも足らざる建築技師素より甚だ少なきが上に而も其民間に在りて造家業に従事せるは大阪土木会社に一名(顧問)、同地にて独立に営業せるもの二名、東京にて清水組に二名、大倉組に二名、三井に二名、日本銀行に二名、他に独立して業に従へるもの二名、都合十三四名に過ぎ、其他の三十余名は皆官庁に職を奉ずる人々なりとす、我邦未だ建築技師は乏きの感を免れずと謂ふべし」とあり、建築界の技師不足の状況がわかる。清水組の2名とは清水釘吉と岡本鑿太郎である。

釘吉は、前出の回顧座談会で(明治20年代は)将来のことを考えると大変心細かった、その後、曾禰中條事務所、横河工務所、辰野葛西事務所など、設計事務所が出来て徐々に増えたものの、専門教育を修めた人が実際家として建築事業家に身を投じようとする者が少なく、先輩が多くいる官途に進み、先輩も少ない民間には仲々人が廻って来なかったが、今は大学が拡張され優秀な学術家が輩出して配置され、事業家の方にも優秀な人を建築技術家として傭聘し得るようになった、ここまでののに相当の年月がかかったと、当時は専門教育を修めた人材の確保が容易でなかったと述べている。

3.6 四代技師長 岡本鑿太郎(在任:明34.6~大2.6)

岡本鑿太郎(慶応3~大正7)は、明治23年7月帝国大学工科大学造家学科卒業。翌24年清水店入店、29年技師となる。岡本の前妻は技師長渡辺譲の妹で、その縁故で入店したと思われる。33年から34年まで洋行。34年技師長となる。渡辺譲の拓いた清水組設計組織の基礎固めをする。晩年まで清水に勤め、清水生え抜きの最初の技

師長である。明治33年『清水方建築家屋撮影』(1~3)には、釘吉との共作も含めて14件設計している。36年頃から、中堅技師を対象とする浪和会が刊行する『建築』の編輯に携わり長く編集長をつとめた。大正2年、田辺淳吉が技師長となった後も2年ほど監事として清水店に留まり、合資会社清水組になる直前に退店した。

明治35年入店の山田耕作は「わたしは製図場(設計部)でしたが、本石町の構えを思い出しながら申すと、製図場は中庭の離れ家で天然スレート葺きの東屋式、化粧軒で床高は地盤から土台四寸上り、縁子板張りになっている。天井は竿縁、囲りは硝子障子で、広さは二間半に三間だったか。岡本釜太郎技師長の時代で店童の繁蔵君を入れて計八名という面々が、全くどうも今日から見れば話の外の人数ながら、みんな青筋立ててやりましたよ」と回想している(『清水建設社内報』昭和35年7月)。

3.7 渋沢栄一と辰野金吾、そして清水店

『いへの寫眞』1帙に収録された清水店の主要な実績の約半数は辰野金吾設計になる建築である。

二代喜助が楓川海運橋畔(日本橋兜町)の国立第一銀行の建築を請け負ったのを契機に渋沢栄一との関係ができたことは夙に知られるが、その銀行が取り壊され、辰野の設計監督、新家孝正の工事監督、清水店の施工により二代目の第一銀行本店が完成した明治35年、辰野は工科大学を辞し、翌36年辰野葛西事務所を開設した。

遡って明治16年、英国留学から帰国した辰野は工部省営繕課に勤め、最初の仕事銀行集会所を設計した際、同所総代渋沢栄一の知遇を得た。藤森照信は、人を見出し人を作ることで知られる渋沢は銀行集会所によって建築家辰野金吾と経済思想家田口卯吉の二人を世に送ったといえるかも知れないと両者の関係に着目している(『日本の建築[明治大正昭和]3巻』)。辰野は還暦祝賀会で、渋沢には終生世話になったと感謝を述べている。民間産業の育成に尽力した渋沢は、民間アーキテクト辰野を支援し、そして民間請負を支援したのである。

銀行集会所が竣工した明治18年、工部省が廃され非職となった辰野は、翌19年2月日本で最初の民間設計事務所辰野建築事務所を開設し、渋沢邸をはじめとして渋沢が関与した会社、工場、学校の建物を設計した。そして、その半数を清水店が施工し『いへの寫眞』に収録した。ただし、辰野はその年の4月に帝大工科大学に復帰し、事務所の運営は共同の岡田時太郎を立てて継続された。

一方、清水店は明治20年代、渋沢邸をはじめ渋沢の関係した人物の住宅、会社、工場、劇場、学校を辰野及び辰野の推薦により技師長、顧問として招聘された坂本復徑、中村達太郎、渡辺譲らの設計により施工したが、そのうち十数件は、兜町の渋沢邸の近く、日本橋区、京橋区にあったことも注目される。すなわち、兜町界隈を東京の商業センターにしようという渋沢の目論見の一翼を

清水店も担ったということになる。

明治10年代後半から20年代初め、三代店主となった満之助がこれからの近代建築と請負業の将来を模索していた頃、辰野の設計する建物の施工をいくつか請け負った意味は大きい。辰野の現場で、満之助ら幹部も現場の者も、イギリスの施工技術、請負の近代化等々、多くのものを学んだに違いない。そして、近代日本の「建築をつくること」を考える多くの教示を得たことは想像に難くない。辰野は、設計者だけでなく《実際に建てる》請負も近代的になる必要性を熱心に説いた。

清水釘吉は、辰野金吾の還暦祝賀会で「初年建築界の甚だ不秩序の時代にありて、アーキテクトのみならず、且つ請負人の心得べき事を指摘して、能く其の業者の改良にも考慮せられたるにあり。此等の三箇の事業は皆先生の偉大の力を持って能くその發展を見たるは皆人の知る所なり。更に商人としての小生の先代清水満之助に對しても、温情を以て指導され、或る時のこと先代の洋行に際し洋服の着方に御注意あり。斯くの如きは些事なるもなお先生の温情を知るに足るべきと思ふ。」と述べ、辰野の請負に対しても近代への脱皮を願う心が「温情」となって満之助に響いたことが窺える。釘吉は、辰野一周忌の挨拶においても、辰野の温情について次のように述べている。

「私は辰野先生に始めて御目に掛かりましたのは私が恰度二十歳の時でありました。私の養父であります先代の満之助と申しますのが洋行を致します時、即ち明治十九年でございます、其春横濱へ態々辰野先生と坂本復徑工學士、折られました其他二三の方に御出でを願ひまして、先代が洋行を致しますに付て辰野先生始め先輩諸君の御高説を拜聴したいと云ふので、横濱の自宅に御招き申しました、其時種々其席上に於きまして御快談を戴きまして、私は恰度大學豫備校に在つた時でありまして、給仕の爲に横濱へ歸つて居りまして、種々辰野先生の御話しを給仕しながら伺つて居りました、其間に置きまして伺つた所に依りますと誠に先生の御話は最も深切を盡されて居ります」「それから大學を outcomes 前到大阪の第一銀行の支店を先生が濫澤男爵から御委嘱を受けられて、それを學生の宿題と致して自分に其設計を申付けられまして、私が先生の指導の下に圖を引きまして、建築することになり、私が實地研究旁々彼地へ差遣されるやうになつて、現場に於て施工の任に當りました、此時亦感じたことは最初に斯く々々と詳しく説明されて、工事上に付て時々通信で御伺ひを致しましたが、萬事私に委かせられて、少しも御疑ひになるやうなことはなく、私などの如き技倆の淺薄なる者でも一旦信用された上は終まで擧げて委かされると云ふ御寛大なる御性格に感じたのであります。」(『辰野金吾傳』)

§ 4. おわりに

辰野金吾は還暦祝賀会の挨拶で、明治16年に英国留学から帰国し工部省御用掛に就いた頃は「建築界は實に幼稚極まるものでありました。建築學の前途は建築家の將來と共に尚遠慮でありまして、創業期に於ける無秩序と不安に充ち充ちて居りました。」と述べ(『辰野金吾傳』)、清水釘吉は、明治20年頃將來のことを思うと大変心細かったと回顧している。遡って明治の初め、本格的西洋建築が導入される以前に、二代喜助は擬洋風建築三部作(築地ホテル館、国立第一銀行、為替バンク三井組)を独自の才覚でつくりあげ、ひと花咲かせていた。

明治14年に二代喜助の後を襲った満之助は、受け継いだ花を継続させ、民間の請負が建築の近代化を実現するために技術を以て立つことを決断した。この決断により専門教育を受けた工学士を技師長として招聘し、清水組設計部の基となる「製図場」がつくられ、本格的西洋建築のノウハウを獲得する過程を、2巻の『清水方建築 いへの寫眞』、7冊の『清水方建築家屋撮影』から読み取ることができた。

付記 渋沢栄一と清水組

本稿では、渋沢栄一と辰野金吾、そして清水組との関係を述べたが、渋沢と清水組の関係について触れておきたい。

二代清水喜助が渋沢と出会ったのは明治5年頃、三井組総支配人三野村利左衛門の紹介による。これより先、文久3年に喜助は三井家の三圃神社の奉納社殿を手がけた後、明治3年に横浜の外国人應接所の工事で評判を得て三野村の知るところとなり、翌4年に海運橋畔の三井組ハウスの建築を請け負い5年完成させた。三井組ハウスは完成直後に国立第一銀行に譲渡され、その際、渋沢と三野村の関係が深まり、それを建てた喜助の卓越した技量が渋沢の知るところとなり信頼を得た。爾來、清水家と渋沢の親しい関係は続く。大正7年、渋沢の喜寿を祝し清水満之助は飛鳥山の渋沢邸に小亭を建てて献呈した。渋沢はこれを気に入り晩香廬と命名して晩年の多くの時間を過ごしたが、昭和6年11月11日、91歳の長寿を全うし逝去した。

清水建設は渋沢栄一の命日11月11日を創立記念日とし、渋沢の説く「論語と算盤」を社是とするなど、渋沢から大きな影響を受けている。渋沢と清水の出会いの経緯はすでに述べた。渋沢が関係する民間の会社、工場、学校、住宅を辰野が設計し、その多くを清水が施工した。その後も、渋沢が関与する会社、財界経済界の有力者の住宅建築の設計も手がけている。

渋沢によれば、第一国立銀行の普請以来、清水家と親しくしてはいたが経営には関与していなかった。清水の相談役として経営に関与し支援が本格的になるのは、明治20年以降のことである。二代喜助の跡を継いだ満之助は、明治19年土木建築の改良を図るため、技師長坂本復経とともに欧米視察したいと渋沢に相談したが、渋沢は多額の費用がかかる上視察して眼ばかり太って手の利かぬでは却て害となるから洋行を中止するよう

懇々説諭した。しかし満之助は反対を押し切り9ヶ月にわたる欧米視察に出かけ、翌20年帰国したが同年4月、34歳の若さで急逝した。未亡人ムメは息子の二代満之助が幼く病弱なため後見人となり、従弟の原林之助を支配人とし、遺言により渋沢に相談役を依頼した。洋行に反対した渋沢は帰国後の挨拶に来た満之助に厳しいことを言い、それが急逝の一因かも知れぬと責任を感じ相談役を引き受けたと回顧している(『清水建設株式会社社史資料』九巻)。満之助が急逝しなければ、渋沢との関係はこれほど深くはならなかったであろう。故人の遺志は生きている者の願い以上に強く訴えるものがあるようである。

満之助の後を受け継いだ原支配人は建設業有志協会を設立するなど明治後期の建設業界のオピニオンリーダーとして活躍したが大正元年に急逝、同2年清水釘吉が店主となった。大正4年10月15日、清水満之助店は個人経営を改め合資会社清水組と改組、後に10月15日は清水組の創立記念日と定められた。

清水を株式会社にすることは三代店主満之助からの念願であり、合資会社初代店長の釘吉も株式組織を考え、昭和2年には具体案が検討されたが時期尚早であった。昭和7、8年にも議題となったが、反対意見もあり実現しなかった。

昭和11年4月22日、三代店主清水満之助の命日に、故人の五十年祭を兼ねて物故店員の慰霊祭、創業百三十三年記念祭、合資会社組織二十周年記念、二十年以上勤続者の表彰が、物故店員の遺族をも招待して盛大に行われた。なお、この17年後に社史『清水建設百五十年史』が刊行された。

会社が拡大するなか、皇紀二千六百年(昭和15年)に東京オリンピックを控えた昭和12年、漸く株式会社へ改組することとなった。この時、株式会社が成立する日を11月11日すなわち渋沢栄一翁の命日と定め、逆算して準備手続きが行われた。昭和12年5月25日株式会社清水組定款を作成、同年7月15日株式申込完了、同月20日第一回払込完了、翌8月24日創立総会開催、翌25日株式会社清水組設立登記完了、9月9日臨時株主総会開催、翌10日取締役会開催、同月25日第二回株式払込完了、同日、10月11日に臨時株主総会開催を決め通知、10月2日第二回株式払込完了の登記、同月11日臨時株主総会開催し清水釘吉を代表取締役とすることを決定、同月28日改印届提出、11月6日監査役住所変更登記、11月11日合併公告ニ対シ異議ノ申立ナシ。合併公告期間昨11月10日ヲ以テ満了し、会社公告「株式会社清水組ハ合資会社清水組を合併シ其ノ権利義務一切ヲ継承シテ存続シ合資会社清水組ハ合併ニ因リ解散スルコトニ各決議相成候間右合併ニ対シ後異議有之候向ハ来ル昭和12年11月10日迄ニ其旨御申出相煩度商法ノ規定ニ則リ此段公告候也。」を発表した。斯くして昭和12年11月11日に合資会社清水組を合併し株式会社清水組となったのである。なお、本店を本社に、店員を社員に改称したのは昭和18年、現在の清水建設株式会社となったのは戦後の昭和23年である。

※ 本稿は『清水建設研究報告』第89号(平成24年1月刊行)所収の稿に、一部修正を加えたものである。